6. Elastase-I (RIA 法) の臨床的意義

中野 哲 北村 公男 綿引 元
武田 功 小沢 洋 熊田 卓
浜野 博次 杉山 恵一 (大垣市民・二内)
金森 勇雄 松尾 定雄 樋口ちづ子
川地 俊明 市川 秀男 安田 鋭介
木村 得次 (同・特殊放センター)
佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

ヒト膵液から精製され，RIA法による測定が可能になった Elastase-I の臨床的意義について検討した．

健常人52名を対照とし，各種消化器疾患患者221名について血中 Elastase-I を測定し，従来の膵酵素 amylase, lipase, trypsin 値と対比，検討し，また急性膵炎，慢性再発性膵炎の経過を，この4つの酵素の変動でみた．一方，PS試験における十二指腸液中のこれら4つの酵素の変動も観察した．

健常者における血中 Elastase-I は，男性の方が高値を示したが，年齢差は明確ではなかった．MV±SD は 142.0±69.4 ng/dl であった．

他の血中膵酵素との対比でみると，trypsin と最も相関し，($r=0.670$ $n=103$ $p<0.05$)，膵障害の経時的変動をみても，amylase に比し本酵素 trypsin 等がより高値で，しかも異常上昇時間が長かった．また，膵液中の酵素分泌パターンを本酵素は最も忠実に反映していると思われた．

7. DCC によるガストリン RIA の基礎的検討

小川 真美 金子 昌生 (浜松医大・放)
真坂美智子 (同・二内)

(目的) ガストリンは，胃酸分泌を調節するペプチドホルモンとして知られているが，今回，私達はガストリンのルーチン化にあたり，ミドリ十字社ガストリン I-125 キットを検討し，若干の知見を得たので報告する．

(結果および考察) 測定方法は，使用説明書に準じたが，反応時間を72時間とし，DCC 添加後20分間放置とした．標準曲線，同時再現性，日差変動，いずれも C.V. 10%以内と良好であった．希釈試験，添加回収試験の成績では，いずれにおいても DCC 添加直前にタンパク補正を行うことによって，満足すべき結果が得られた．ただし 6.3 g/dl 以下の総タンパク量では，測定値は高く測定される傾向がみられた．特にその変動は，グロブリン濃度により大きく依存しているという結果を得た．

健常成人男女47例の平均値は，36.4±19.4 pg/ml (mean±1 S.D.) であった．

これらの結果から，DCC を B-F 分離剤とする本キットでは，正確な値を得るために，チューブ当りのタンパク濃度を均一にすることが，特に重要であると思われた．

8. ^{125}I-labelled progesterone RIA kit (CIS 製) の使用経験

浅野 智子 山田 祥代 河合 恭嗣
江尻 和隆 (名保衛大・放)

CIS社より開発された Progesterone kit の基礎的検討を行った．

Intraassay 5.2～12.2%, interassay は，8.2～13.6%であり，また標準曲線の再現性も，良好であった．回収率は，86.7～126.1%となり，低濃度部で多めに回収された．希釈試験の結果も良好であり，妊婦のような高濃度領域の検体も，十分測定可能であった．第一インキュベーション時間は 30～40 分，第二インキュベーション時間は2～3時間が適当であった．第一ラジオアイソトープ研究所の Progesterone kit との相関は，$y=0.81x+0.914$，相関係数 0.885 であったが，第一のキットの方が，やや高めであった．

本キットを用いて測定した正常月経周期における血中 Progesterone 値は，月経期 0.33±0.062，卵胞期 0.36±0.16，黄体期 8.21±3.48 ng/ml であった．

9. New England Nuclear 社 kit による血中 β-Endorphin の測定

橋本 琢磨 西部万千子 松原 藤継
(金大・検査)
沢井 武 (沢井医院)

(目的) 最近 New England Nuclear 社 (第1化学薬品)より β-Endorphin の RIA kit が市販されるようになった．われわれはこの kit に関し基礎的検討を行い，健常人における血中 immunoreaktive β-Endorphin の濃度および各種薬剤に対する変動を検索した．

(方法) 健常人20名は医学部学生(平均年齢20.5歳，男

Presented by Medical*Online